エッセイ

サッカーと愛国心

SCE･Net　弓削　耕

E-04
発行日
2006.6.26.

奇跡は起こらなかった。ブラジルに大敗して、日本の 2006 年のサッカー・ワールドカップは終わりました。大会前、試合前のマスコミの報道は凄まじいものがありましたが、結果が伴わないと後は惨めなものです。日本がワールドカップに出られるようになるのに 44 年かかり、今回は 3 回目の出場ですが、前回、開催国の特典に恵まれての決勝トーナメント進出がやっとの成績でした。

サッカーも全くの素人の俄かファンの 1 人に過ぎませんが、サッカーは他の球技と比べると、点数が入らないのが特徴です。それにしても日本のサッカーは得点能力が低いような気がします。外国のチームがロング、ミドルを含めて多くのシュートをするのに､日本のチームはゴール近くに行ってもあまりシュートせず、人が良いのか、ゴールキーパーの居る方に丁寧にシュートします。それに、走るスピードが違い、外国チームは休みなく走るようですが、日本チームは少しパスをしては一休み､という状態のようです｡チームの和を大切にするのでしょうが、どちらかといえば、攻めるよりは、守りに力点を置いているようで、専守防衛の憲法９条タイプのサッカーといえましょう。攻撃が最大の防御です。侵略戦争ではありませんから、まず攻めまくるのが必須のように思いました。全体として力不足、脚力不足で、よく言えば気の弱い、お人よしのサッカーで、蹴鞠の延長線上にあるような淑やかさを感じさせるものです。

それでも、大会前の評判から、オーストラリア、クロアチアには勝てるという期待もあって、TV 観戦は熱を帯びました。試合当夜の銀座通りは閑散としていましたし、視聴率は 40-50%でした。もっとも隣国の韓国では、日本より強いこともあって、視聴率は 70%を越えたそうです。前回、全世界では 300 億人の視聴者がいたとのことですから、1 人平均 5 試合、1 試合平均 5 億人は見ていることになります。日本の試合は 2 試合とも現地時間で暑い最中に行われ、選手は必要以上に体力を消耗し持続力がありませんでした。お陰で日本のファンは過度の睡眠不足にならずにすみましたが、選手には若干の無理強いをしたかもしれません。FIFA（Federation Internationale de Football Association、国際サッカー連盟）への加盟国は 207 で、オリンピックの 204 国を超えるので、世界一のスポーツ行事となっています。少なくとも出場国の熱狂度はオリンピック以上です。

日本がサッカーで世界に競っていくには、真っ向からの体力勝負では永久に無理なような気がします。かってバレーボールが日本独特の技術、技能を駆使して活躍しましたが、世界の国々が注目し、力を入れ、体力差の勝負に持ち込まれると勝ち抜くのは難しくなりました。サッカーは始めから体力、走力勝負の世界に

入っていったので、真っ当に勝負するのには無理があります。日本としては、可能性は低いが、突出した能力ある選手が出ることを期待しつつも、全体として持続力や走力を増し、多少とも体力をつける努力をした上で、得意の知恵を働かせ、体力をカバーする戦術、小技を考え出して、チーム力でカバーし、日本独特の作戦を考え出さないと勝ち抜くのは難しいでしょう。90 分も走り回り、短時間に集中して体力を使わねばならないので、野球よりは体力の差が出てきます。

政治や経済、技術の世界でも同じでしょう、グローバルスタンダードとかいって、アメリカの土台で勝負をさせられると、日本とは考え方が違い、文化が違い、体力にも差があるので、まともに競っては勝ち目がありません。日本なりの、知恵を働かし、工夫をしないと勝てません、勿論、ルールを無視してということではありません。国際ルールを尊重しながらも、それに溺れさせられることなく、日本独自の方法で、日本なりに生きていく方法を考えていかなければなりません。サッカーなら、まだ負けた時の悔しさだけで済みますが、経済や政治、外交、技術、教育、文化の世界で負けては国の存亡に係ります。

オリンピックとか、ワールドカップ、WBC（世界野球選手権）など世界的な競技が行われると、多くの国民が湧きます。日本でも、日頃は日本人ということをあまり意識していなくても、世界的な競技になると、日本の国を応援することになります。日の丸や国歌を中心に、応援歌や幟を立てて現場で応援する人は勿論、国内でも TV を通して応援し、負けると次の日の仕事にも差し支えるようで、少なくとも職場などでの話題になり、日本国民としての一体感を感じるのではないでしょうか。日本はまだ国民性としても大人しい方で、外国人の熱狂振りには、最近激しくなったとはいえ日本の騒ぎも到底及びません、この点は真似する必要はありません。海外ではワールドカップの試合中は仕事が中断したり、勝つと国民の祝日になったり、負けると国同志、あわや一触即発という状態にもなるようです。それぞれの人が、自分の国を応援します。これは国民として必然のことなので、それぞれの国でスポーツ愛国心が高まるということでしょう。

日本でもサムライ・ブルーが勝ち進んで行けば、もっと熱が上がり、スポーツ愛国心も高まったことでしょうに、ある意味で残念に思った人もいることでしょう。日本人には「愛国心」がないので、教育基本法を改正して「愛国心」を植えつけようなどの試みがなされていますが、国際競技で日本が強くなっていけば、少なくともスポーツ愛国心は必然的に芽生え、高まることと思います。

人間は幼・少年期に親子・兄弟関係から家族の愛を知り、師弟関係から師弟の慈愛を感じ、人間としての基本的な生き方を学び、自己を確立し、長じて周りの社会を意識し、郷土の歴史や文化を学び、郷土の美しさや素晴らしさを知り、地域・社会に貢献することを学び、さらに国の在り方を考えるようになります。そして家族や地域や国に対して成すべき事を知り、貢献するとともに、国の進むべき方向を正していかねばなりません。これが愛国心でしょう。「愛国心」というものが如何なるものかということは、教育で教えるべきですが、愛国心の度合いは評価するものではありませんし、強制するものでもありません。美しい郷土が住

み易く、誇りうる文化、芸術、技術を持っていて、そこの住人も素晴らしい人達であれば､全ての人に郷土愛､愛国心が自ずから芽生えて来るものだと思います。現在のように、子供の頃から、親の愛情が薄く、師の恩が薄弱で、家庭や学校の周囲で自由に遊んだり、学ぶことが出来ず、誘拐や暴力から身を守るために、必要以上に大人不信の気持ちを植えつけられては、郷土に親しむことも出来ず、人を愛する、郷土を愛する気持ちなど湧いて来ないでしょう。

海外で暮らすと日本のこと、文化や風土、国民、国旗や国歌などを強く意識するようになります､日本のことを批判されて簡単に同意する人は居ないでしょう。何とか日本を弁護し、誇り、日本の良さを強調するでしょうし、日本人としての矜持を持って行動するでしょう。これも母国、郷土を愛する気持ちの発露と思います。　短期の旅行をした人でも、帰国の際に日本の飛行機に乗り、日本料理などを出されると、日本に生まれて来たことの良さを身に沁みて感じたことでしょう。　海外に出て､日本を外から見ると､日本では気がつかなかった日本の良さ、悪さに気がつき、大概の人は愛国者、日本の郷土を愛する人になると思います。

国のシンボルとしての日本の国旗や国歌に馴染めない人もいます。戦争中の忌まわしい気持ちを持つ人のあることも分かりますが、戦争の経験の無い人にも大事にされていません。教育で教え込んでいないからです。　サッカー競技場でさえ、国旗を掲げ、国歌を歌い、何処の国の人でも自国と相手国の国旗や国歌を尊重し、敬意を払っています。学校や職場で、国旗や国歌が尊重されないような国は世界でも数少ないでしょう。君が代は相撲協会の歌ではありませんし、ましてやモンゴルの国歌ではありません。

それにしてもサッカーの監督に外国人が続くというのは、どういうものでしょうか。日本人の気持ちはやはり日本人の方が良く分かるものと思います。現状の日本のサッカーでは個人技尊重の外国人監督よりは、組織力重視の監督の方が適任のような気がします。明治時代の文明開化、技術導入の時代であれば、外国の指導者というのは分かりますが､サッカーはまだそんな時代にあるのでしょうか。国際化時代ですから、日産のゴーン氏とか、ロッテのバレンタイン監督などの成功例もあり、現代でも時には刺激を与える意義があると思いますが、いくら外国人、特に西洋人の意見に唯々諾々の日本人が多いとはいえ、主体としては日本を考え、全てに日本的なものを確立していかないと根無し草の日本になってしまいます。サッカーだけなら未だこらえられますが、全てに日本的なものが失われ、郷土愛、愛国心も失われていくようでは先行き不安です。

世界に貢献する､信頼される国となり､技術的にも、文化面でも、教育面でも、スポーツの活動でも品格のある一流国であれば、国民の国を愛する、郷土を愛する気持ちは失われないでしょう。

スポーツも技術も世界一流レベルを達成することは難しいことを実感しました。サッカーイレブンの皆さんも更に研鑽し、強くなることを希望します。お疲れ様でした。

（2006.6.26　　SCE・Net　弓削耕）